

はみだす緑の愉しみ

街の隙間に存在する「路上園芸」

20代の頃、とあるイベントで、お土産にトマトの苗が配られたことがあった。

一緒に参加した弟と苗を一つずついただいたところ、まめで几帳面な弟は、当時一人暮らししていた部屋のベランダで見事にトマトを収穫。確かトマトに続いて、ラベンダーも育てていたように思う。

一方の私はというと、収穫を待たずにあっさりとは枯らしてしまった。

「グリーンフィンガー」とは真逆な私であるが、ある時期からどういっわけか「植物」なる存在に心動かされるようになった。

軒先に置かれるパンジーやアロエの鉢植え。ツタやフジに包み込まれた家。軒先で怪獣のように大きく成長したサボテン。マンホールの穴から顔をのぞかせるツメクサやコケ…。

路上園芸鑑賞家

むらた
村田 あやこ

私が特に目を奪われてやまないのはそんな、街中の空間で営まれる園芸や、街の隙間に生きる植物たちの姿だ。

緑豊かな地方都市で生まれ育ち、大学卒業後に上京。隅々まで人工物に覆われた東京では、もう自然



とは無縁かと思いきや、軒先でいたが、軒先の園芸や隙間の野草を通して、自然に触れることが出来る。と気付いた。路上で営まれる園芸や、路上でたくましく生き抜く植物を「路上園芸」と称し、約10年間、観察を続けている。



時の調べ
Essay

人の園芸愛と、植物の生命力のみだし

広い庭を設けることが難しい街中では、路肩や室外機といった路上空間が、しばしば「庭」の代わりとなる。時には電柱やガードレールなどの公共空間に園芸愛がはみだすことも。鉢植えから、その場所に親しみや愛着を持つて暮らす人の気配を感じる。生活と密着し紡がれる園芸風景は、程よく肩の力が抜け、健やかで押し付けがましくない魅力がある。

密集した鉢植えは、街の緑の景観の一部をなす。季節ごとに色とりどりの花で彩られる軒先は、そこに住む人だけでなく、私のようにただ道ゆく人の目も楽しませている。

あらかじめパッケージされたものを、漫然と消費することにどっぷり浸かっている自分。そうした日常に、植物を種や苗、挿し木などから育て、心地よい空間を手ずから生み出し、さらに周囲の風景をも



みずみずしく変えてゆく路上園芸を見てみると、人間が持ち得る根源的な創造力を感じ、心が奮い立つ。

そして植物は植物で、ちよっとした隙間をうまく活用し、街中の環境で生き抜いている。植物の今ある姿

は、周囲の環境に対する最適解とも言える。舗装に生える緑は一見「ど根性」に見えても、実はその下に水や泥がたまっていたりして、意外に最適な環境をうまく見極めているのだろう。

グレーチングや雨樋など、思いがけない場所からもじゃっとはみだす植物を見ていると、街中に潜む隙間が可視化される。計画されたものが中心の街中で、想定外の「バグ」感が楽しい。

路上園芸から垣間見える豊かな植物文化

大海のようなオシロイバナに、路肩の隙間に導火線のように列をなすヒルザキツキミソウ。最寄り駅を出てスーパへ立ち寄り、家へ帰るといつもの道のりでも、季節ごとに表情が変わる「路上園芸」が、日々目を楽しませてくれる。

人が育てたものから自然と生えたものまで、どんな街にも、その場所をうまく利用して育まれる「路上園芸」が存在する。

幕末に来日したプランツハンター、ロバート・フオーチュンは、庶民に至るまで草花を愛でる日本人の姿に驚いたという。その豊かな植物文化の基層は、今も脈々と受け継がれているように思う。

阿佐ヶ谷姉妹の真似をして育てはじめた豆苗はあつという間に飼いい猫にバリバリにかじられ、無残な姿になってしまった。相変わらずグリーンフィンガーとは程遠い私ではあるが、街を豊かに彩る路上園芸家の皆様に憧れと尊敬の念を持って、これからも路上園芸観察を楽しんでいきたい。



略歴
福岡県生まれ。街角の園芸活動や植物に魅了され、「路上園芸学会」を名乗り撮影・記録。書籍やウェブマガジンへのコラム寄稿やイベントなどを通し、魅力の発信を続ける。著書に『たのしい路上園芸観察』（グラフィック社）。寄稿書籍に『街角図鑑』『街角図鑑 街と境界編』（ともに三土たつお編著／実業之日本社）。